

富士山一周の旅 2017



2017年12月

旅のチカラ研究所 植木圭二

2017年12月富士山周辺の自動車旅行に行ってきた。冬のこの時期ならではの素晴らしい富士山の雄姿を眺め、グルメ、キャンプ、温泉を満喫する旅を紹介する。

■いざ、極寒キャンプへ

例年、極寒キャンプは厳冬期の1月に猪苗代湖で実施するのだが、2018年1月2月は私が長期海外クルーズを予定しているので少し早めて12月に実施することになった。言うなれば極寒キャンプ2018というところだ。

冬のこの時期は富士山が綺麗なので、場所も変えて本栖湖を選んだ。私にとっては家族と2年前の年末に来て以来の本栖湖キャンプになる。(旅行記「極寒キャンプ2017」参照)

テレビのニュースでは東北や北陸では寒波の影響で大雪となっている。ところがそういう時ほど太平洋側は乾燥し晴れている。富士五湖周辺も快晴で空気が澄んでおり絶景の富士山を拝むことが出来る。今回の極寒キャンプは富士山とともにある。

本栖湖を目指して神奈川県を私の車で出発する。参加メンバーは私を含め4名で極寒キャンプ創始メンバーのひとりKちゃん、一番若いEちゃん、と言っても40代だ。そして地球一周の旅で知り合ったOさんは京都から参加だ。

■吉田のうどん

東名高速を御殿場で降りて山中湖を経由して富士吉田市に入る。富士吉田といえば吉田のうどんということで、うどんの看板を多く見かける。そしてまだ11時半というのにEちゃんはうどんを食べる気満々で既にスタンバイOKらしい。さすが若い、そう鉄の胃袋だ。

偶然、道路沿いに吉田のうどんの旗を見つけたので、うどん専門店「ふもとや」に入る。ここは50人くらい入れそうな広さの食堂だが、この時間なのにほぼ満席の盛況だ。地元の人気店らしく、いかにも地元の人というジャージに半纏(はんてん)姿の人が多い。

早速、きんぴらうどんと肉天うどんを注文する。どちらも500円程で手頃な値段なので地元で人気の理由も分かる。天かすや漬物も自由に取り放題なのもまた良い。

腰の強い麺は吉田のうどんの特徴だが、同様に腰が強いことで有名なのは讃岐うどんがある。讃岐はツルツルで硬い、吉田はザラザラ感が残っていて実のところ讃岐より腰はない。どちらかと言うとすいとんを伸ばしたようでネットリした食感だ。

醤油味のだし汁とトッピングは、昔ながらの庶民の味でこれが実に美味い。七味唐辛子を多めにふりかけるとピリ辛のアクセントが付き、最後まで汁をすすってしまう。

この旅は幸先が良い。旅の最初の食事に満足するとそんな気がしてくるから面白い。



この秋に山梨県から嫁いできた息子の嫁に後日聞いたが、この店をよく知っていた。もちろんこの店にもよく食べに来ていたそうだが、営業時間が11時から14時という事でいつも駐車場がいっぱいなので地元でもあまりありつけないらしい。私たちは相当幸運だったかもしれない。

彼女の実家では、この店に麺を卸している製麺所から麺を買ってくるという。そういえば先日はその麺を頂いたのが我が家の鍋料理のメに使ったことを思い出した。そうか、あの食感だ。

ただ彼女は製麺所の職人の高齢化によりいつまでこのうどんが食べられるか心配していた。

富士山のふもとである富士吉田市は海拔650mから900mであり、寒さと溶岩質の土壌のために稲作が困難だった。そのために麦作が行われ、伝統的に小麦を中心とした粉食料理が日常食とされていた。当初はすいとんを主食としていたらしいが、江戸時代からは富士山信仰による訪問者が多くなるにつれ、うどんが振る舞われるようになったという。

やはり富士山とはありがたいもので、うどん文化を生み出したのだ。

■富士五湖

富士五湖とは1927年に富士急の創始者が名づけたという。実に分かり易くて良い名前だと思う。やはりネーミングは重要だ。

東にある山中湖、川口湖の2湖は開発が進んでいて観光施設も多く大型バスも多く見かける。ところが残りの西湖、精進湖、本栖湖はあまり開発されてなく自然が多く残っており観光客も少

ない。大型バスが来るようになると、中国人団体客が多くなるので、どうしても私としてはこちらの3湖に足が向く。

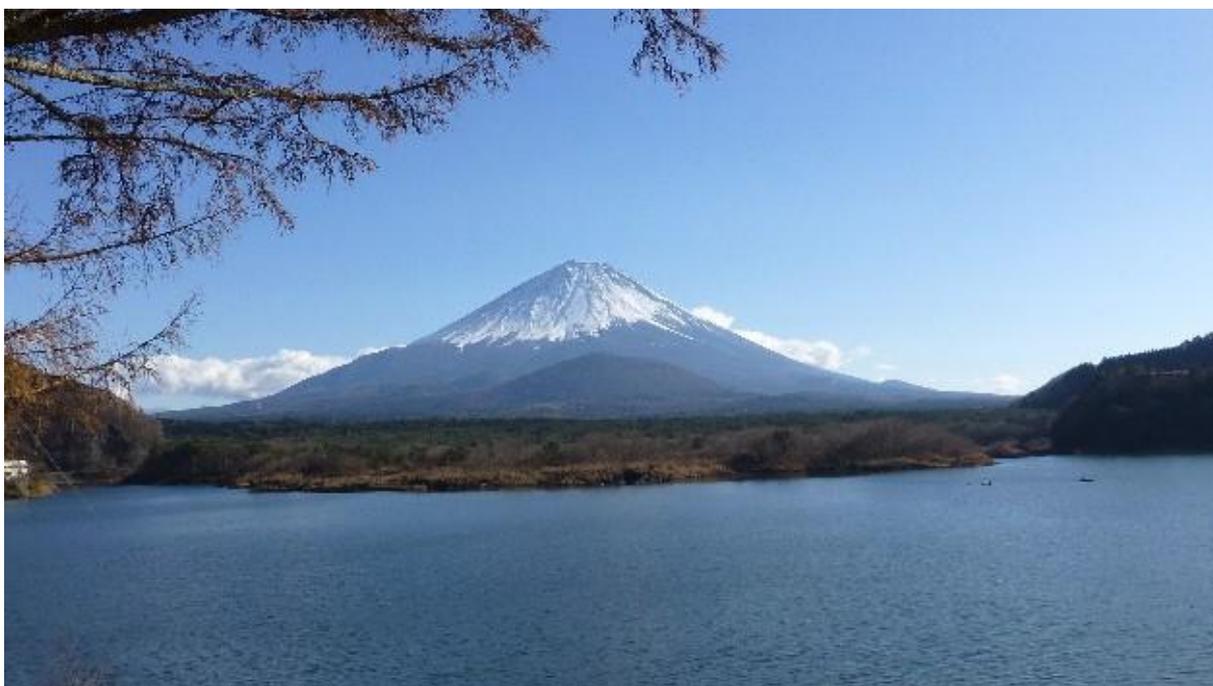
そしてこの3湖には興味深い関係がある。湖面の標高水位は山中湖が一番高く978m、一番低いのは河口湖で833mだが、なんと西湖と精進湖と本栖湖は同じ水位で899mである。ということはその3つの湖は地下でつながっていることになる。

20年くらい前のことだが、私がかんりの頻度で富士五湖にキャンプに来ていた頃で、ある年には大雨が続き本栖湖の水位がかなり上がったことがある。精進湖や西湖も上がったのだが、本栖湖だけが周辺道路も冠水していた。どうやらトンネルのような地下水脈でつながっているのではなく、緩やかに水が浸透する砂や砂利の層が地下にあるのだろうと推測できる。

3湖の真ん中で、一番小さい精進湖に立ち寄る。やはり観光客は少ない。そんな中でワカサギを釣っている釣り客もいる。小さな船の上に風よけと暖房を兼ねたビニールハウスのようなテントを装備した船も数隻見える。こののんびりしている感じが何となく良い。

精進湖からの富士山を湖越しに見るが、実に見事な富士山だ。同行メンバーは写真を撮りまくっており、早速スマホで下界の友人に送っている。リアルタイムでこの富士山の雄姿を共有できるというのは本当に技術の進歩はすごい。

ただこの寒さと目の前に広がる臨場感は到底伝わらない。この臨場感こそが人間に感動を与えることが出来る。だからこそ旅行や冒険という体験に価値が生まれる。



■本栖湖キャンプ始まる

千円札の裏にある富士山の写真は本栖湖の北側にある中ノ倉峠から写したもので、この中ノ倉峠の下に本日泊まる浩庵キャンプ場がある。だから日本一の富士山を拝むことが出来るのでこのキャンプ場は冬でも人気が高い。いや富士山が綺麗に見える今の時期は特に人気があるのかも知れない。

テントサイトに駐車している車のナンバープレートは東北から関西まで広範囲で、色んな所から集まって来ていることが分かる。



今日は 30 張り程のテントが設営され、みんな焚火をしながらのんびりと富士山を見ている。私達も早速設営を開始する。設営が終わるか終わらないかで、Kちゃんが「そろそろ良いでしょう」と缶ビールを手にプシュと音をさせる。

うわ、もう始まったと一同声をあげるが、既にみんなの手はマグカップを差し出している。

火をおこし焚火をするには薪が必要で、それを持参することが多い。今回の薪は私の実家にあつた仏壇である。実家の処分に伴い不要の仏壇も処分することになり、御先祖様にお礼を言いながら火にくべて暖をとる。さすがに十分に乾燥しており薪としてはパーフェクトだ。そして格別に暖かい。霊峰富士の麓で、ご先祖様に感謝しながらの焚火になる。こんなに素晴らしい場所はとても良い供養になるだろう。

絶景の富士山を見ながらの焚火もまた臨場感抜群だ。寒さと暖かさに交錯して煙の臭いが何とも言えない。

そして焼き鳥だ。いつものように七輪で焼くので最高に美味しい。寒い時のホットワインも格別に美味しい。日本酒好きのEちゃんは冷で地酒を呑んでいる。やはり鉄の胃袋は健在か。

■本栖湖で奇跡が起こる

そのEちゃんが今回は釣り竿を持参してきた。今から本栖湖の魚に挑戦するという。

私は過去に何人もこの本栖湖で釣り糸を垂れた人たちを見てきたが、皆坊主だった。かつて一緒にキャンプに来ていたメンバーに至っては水面下のキャッチ&リリースと開き直る輩もいた。

そんな難攻不落の本栖湖の魚に挑むという大変な意気込みで行ったEちゃんが夕暮れ近く戻ってきた。

何と、手には魚を持っている。

ニジマスらしい。

私もKちゃんも驚きのあまり声が出ない。

しばらくして落ちつくと、Eちゃんは得意な顔で釣った時の様子を話し始める。彼の舌はそれはもう実になめらかである。世の中は勝てば官軍という事を改めて思い知る。

その官軍の証である錦の御旗ならぬ一匹のニジマスをEちゃんが上手にさばいて、七輪で焼きそして皆で食べる。さすがに取れたての魚は新鮮で旨い。この奇跡（失礼）のニジマスの味は参加メンバーのキャンプ人生で忘れられないものとなるだろう。



この日この夜の本栖湖は風もなく静かで、富士山はその威厳を存分に示している。気温はマイナス 2℃だが、厳冬期の猪苗代湖の極寒キャンプに比べればやはり暖かい。いや、このコンディションは仏壇の焚火によるご先祖様のご加護かもしれない。

■富士山の西側

富士山の西側を回り山梨県から静岡県に入ると「ふもとつばらキャンプ場」がある。名前のとおり、富士の麓（ふもと）の原っぱだ。相当に広い草原のキャンプ場で、東京ドームで例えると4個分くらいはある。富士五湖のような湖が無いので富士山は大変近く大きく見える。

このキャンプ場は 2005 年オープンで株式会社ふもとつばらが運営している。コンセプトは「全ての人に自然の中の生活を！」という。自然の中で癒しのひとときを提供したいという社長の思いが感じられる。自然をテーマにしたベンチャー企業とでも言った方が良いかもしれない。

恐らく、ここから見る富士山の絶景が彼を動かしたのだろう。

管理棟に立ち寄って、見学だと言うと対応してくれたのは若い綺麗な女性スタッフだ。なんでこんなところでアイドルのような女の子が働いているのだ。思わず目を疑ってしまう程の清楚で可愛い感じの美人だ。社長のコンセプトに騙されて、いや失礼、共感して働いているのかも知れない。

旅のチカラ研究所でも所長のコンセプトに共感して働いてくれる美人がいないか、などと考えてしまう。

そんな相手なのでついつい長話をしてしまう。富士山も美しくて良いが、目の前にいる綺麗な女性もまた良い。

ここはテレビ取材も多く入るようでスタッフの対応も実にテキパキしている。



更に南下すると田貫湖がある。大きさは精進湖よりも一回り小さい。一周が 3.3km なので湖をひと回りの散歩コースとしては最適である。

場所的には富士六湖と呼んでも良いかも知れないが、実はここ田貫湖は人造湖なので富士五湖とは生まれが異なる。

田貫湖が有名になった理由はダイヤモンド富士が見えるからで4月20日と8月20日頃見ることが出来る。ダイヤモンド富士とは富士山頂上から朝日か夕陽が輝き、その姿が水面に逆さに写ることを言う。この逆さ富士も含めて上下から太陽の輝きがあることがダイヤモンドになる重要な条件だ。

ダイヤモンド富士の見える場所も限定されており、それも朝日ということならば日本でただ一つ田貫湖のほりにある「休暇村富士」のあるあたりだ。この建物はダイヤモンド富士が有名になったので近年建設された。そしてなんとその「休暇村富士」の大浴場からその景色を見ることが出来る。

最近、その時期のその場所はとにかく人が集まる。プロも含めカメラを持った人たちでごった返す。さすが富士山の集客力は半端でない。

富士山西側には大沢崩れと呼ばれる大規模な侵食谷があり、田貫湖からはその大沢崩れを正面に見ることが出来る。侵食谷は最大幅 500m、深さ 150m、頂上の火口直下から標高 2,200m 付近まで達する。そのために富士山西側には登山道が無い。

そして大沢崩れは現在も進行しており、落岩の音が絶えない。現在でも1日あたり10トン積みダンプカー28台分ほどの崩壊量があるという。

富士山は生きているという事だろう。



■ 県道 223 号線

田貫湖から更に南下し駿河湾沿いに清水港まで車を走らせる。この清水港のすぐ近くには羽衣伝説で有名な美保の松原があるが、今回はフェリーに乗って土肥港を目指す都合で時間の関係で今回は省略となる。

その三保の松原には世界遺産に登録された時に訪れたが、松は見事なのだが、松原超しに見る富士山はやはり小さい。今回は特に大きな富士山を見てきたことからすると省略は正解だったかもしれない。

旅の企画とは感動の演出という観点からすれば見ないという選択も正しい。時間の節約だけでなく感激を圧縮することも必要だという事で、このようなことに気が付くことは少ない。今回は偶然とはいえ、そんな勉強ができたことは嬉しい。

清水港も土肥港も同じ静岡県なので、この清水ー土肥のフェリー航路は県道 223 号線と正式に命名されている。223 つまり「ふじさん」という語呂合わせだが、なんとも粋な計らいである。

駿河湾超しに富士山を見ながら約 1 時間の船旅も楽しい。他のメンバーはこの航路の存在を知らなかったようで、一同驚いていたのが印象的だった。

県道 223 号を航行中、右舷に海上掘削基地のようなものを見る。あとで聞いた話では地球深部探査船「ちきゅう」で、人類史上初めてマントルや巨大地震発生域への大深度掘削を可能にするという世界初の科学掘削船だそうだ。

ここ駿河湾で東海地震の予知のための掘削をしているのだろうが、毎日あの雄大で美しい富士山を見ながら仕事ができるのだからうらやましい。



■やるね、大江戸温泉物語

土肥港のすぐ近くには土肥温泉があり、その「大江戸温泉物語マリンホテル」が今夜の宿だ。

大江戸温泉物語という会社は経営難に陥った旅館、ホテルを傘下にして再生させるビジネスモデルで最近急成長しているホテルグループで、このようなビジネスモデルでは既におおりのグループと伊東園グループがあるが、3匹目のドジョウを狙って数年前に参入したのが大江戸温泉物語だ。

前出の2つのグループは低価格の顧客層をターゲットに展開しているが、それに比べるとやや高い顧客層をターゲットにしているのがこの大江戸温泉物語になる。今回の宿泊費は一泊2食さらに飲み放題付で9500円というから安いのだが、他の2つのグループ比べると2000~3000円は高い。

私はこの価格設定に興味を持ち、今回はこの大江戸温泉物語の調査も兼ねて初めてこのグループの宿に泊まることとした。

宿の着くと昨日キャンプの焚火で燻製になった体を洗うために早速風呂に向かう。もちろん温泉だ。泉質は無色透明弱アルカリ泉で湧出温度は56℃くらいだ。サウナも露天風呂もあり展望風呂という海が大きく広がって見える風呂もある。

風呂の中で地元のおじさんから話を聞くと、この土肥温泉は近くにある土肥金山の副産物で金山を掘っていたら温泉が出てきたという。海に浮かぶ「ちきゅう」のことも教えてくれた。6つの推進力を持つので同じ位置にいることができるという。こんな人を物知りと言うのだろう。

食事はビュッフェスタイルの食べ放題で、メニューはかなり充実している。その場で調理してくれるステーキや天ぷら、更に寿司やシャブシャブなどもそろっている。

部屋もリホームして間もないこともあってか、比較的綺麗になっている。そういえばEちゃん

がホテルのアンケート用紙に風呂の照明器具が汚れている旨を書いていたが、そこだけが目立つということで、他はきれいになっているという裏返しかもしれない。

そしてフロントの対応もなかなか良く、掃除のおばさんにしても親切な対応をしてくれた。経営難に陥った企業の再生というのは従業員教育が柱になるというのが、相当にしっかりとした教育をしたに違いない。

客室稼働率も比較的高いようで、お客の入り具合はよさそうだ。さらに客層も悪くない。宿泊費を安くするとモラルの低いお客も多くなるが、そうっていないのは、やはりやや高めのお客様層をターゲットに設定したビジネスが上手く回っているように感じる。

いつものように温泉評価委員会（通称：おひょい）で宿の評価を行う。訪問メンバーによる基本 5 段階の主観評価になり、メンバーの平均値で算出する。

今回の評価結果は、泉質 3.1、風呂 3.8、料理 3.9、コスパ 5.0、秘湯度 1.5、サービス 4.3、建物・部屋 4.1、料理 4.4 で総合点は 3.9 になった。

ここで一つ疑問の声が上がった。秘湯度についてである。この温泉宿に秘湯を求めて来訪する人はいないのではないか、確かにそうだろう。

秘湯度の評価を除外すると総合点は 4.3 にもなる。

経験上、総合点で 4.0 以上というのはかなりのレベルだ。前回は行った秘湯「八丁の湯」総合点は 4.4 なので、肉薄している。やはりコスパの 5.0 が効く。

■ 帰路、そして振り返り

最終日は 2016 年に世界遺産登録された韮山反射炉に立ち寄る。（韮山反射炉については旅行記「格安！伊豆の旅 2017」参照）

熱海のはずれにある網代の浜料理「藤哲」で最後の昼食をする。この店は私がいつも行く伊東の宇佐美の「ふしみ食堂」が休みだったので偶然立ち寄ったものだったが、なかなか良い。味はもちろん、刺身は十分な量が出てくる良心的な店だ。

吉田のうどんを感じた旅の予感がここでも的中する。不思議なものだ。

今回の旅は天気にも恵まれたことが特に大きいですが、本来この季節はあまり天候が崩れない。

2泊3日で富士山をほぼ一回りして、富士山のさまざまな顔を見てそこで生きる人々に触れることが出来た。やはり富士山を起点に生活の拠り所になっている人は多い。

私としては読者の方々に今回のコースをトレースすることをお勧めしたいが、冬のキャンプはちょっと難しいという人は浩庵キャンプ場に併設されている民宿を利用すると良い。私も一度泊まったことがあるが、少し高台にあるので景色はキャンプ場よりも良い。

費用は総額で約 8 万円、一人当たり約 2 万円になった。2泊3日飲み放題食べ放題でこの価格は安い。内訳はガソリン代 3350 円、高速道路 2230 円、駿河湾フェリー 12190 円、キャンプ場入場料 4400 円、食料と酒代 18950 円、土肥マリンホテル（4 人分）38600 円。

実施は 2017 年 12 月 9 日～11 日、澄みきった空気と青空が広がる 3 日間だった。